

SVA

阪神・淡路大震災

復興支援活動報告書

仮設住宅のふれあいセンターで、こいのぼりをあげる子どもたち（1999年5月神戸市西区西神第7仮設住宅にて）



SHANTI
VOLUNTEER
ASSOCIATION



社団法人
シャンティ国際ボランティア会(SVA)
〒160-0015 東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3F
【電話】03-5360-1233 【Fax】03-5360-1220
【URL】<http://www.jca.apc.org/sva/>

ご支援頂き、
ありがとうございます。

1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災から6年以上が経過しました。

SVAは震災から2年3ヶ月間現地事務所を設置し支援活動を展開。その後、現地の関係団体を応援するための募金活動を行い、また、災害後に立ちあがった様々なネットワークの一員として活動してまいりました。募金のお願いについては、1999年度をもって終了しましたが、その寄せられた募金をもとに、2年間にわたり現地の団体を応援し、この3月をもって、資金提供も終了させて頂きました。

今回は、SVAの阪神・淡路大震災での支援活動の終了をお伝えし、この6年間にわたりご支援頂いた約9000人の方に感謝の意を示すため、この報告書を同封させて頂きましたので、ご一読頂けたら幸いです。

しかし、SVAの活動に一応の区切りがついたからといっても、震災が残した傷跡は今でも、市民生活に大きな影を落としています。未だに復興しない街、業績があがらない仕事、再生しないコミュニティなど、前途は多難です。しかしその一方で多くの市民が自ら立ちあがり、ボランティア活動をはじめ、まちづくり、福祉、就労、教育などの様々な分野で、行政に提案し、時にはモデルケースを作り上げています。単なる「災害からの復興」ではなく、「新たな創造」を目指して、動きが活発化しています。この報告書から、そんな息吹を皆様にお伝えできたら幸いです。なお、SVAの支援活動をまとめた『混沌からの出発』シャンティブックレットシリーズ2も出版しましたので、そちらも是非、お手にとって下さいますようお願いいたします。

2001年8月

社団法人 シャンティ国際ボランティア会
会長 松水 然道

後方支援から ネットワークへ

再建された長田区番町地区の市営住宅 (2001年1月神戸市)

SVAの支援活動の取り組みと見えてきたもの 被災地・神戸での活動

SVA設立以来の国内最大の災害であった阪神・淡路大震災。海外での活動の経験を生かし、少しでも貢献できたという思いから、震災後2日後にスタッフを派遣し緊急救援活動が始まった。当初、曹洞宗青年会と曹洞宗両大本山と協力として、避難所へのボランティア派遣、炊き出しの補助に取り組んだ。また、子どもの遊び場作りや移動入浴フロシエクトなどの個別ニーズに対応したり、行政関係機関、社会福祉協議会や他の民間団体と連携した活動を行った。

3ヶ月後、被災地外から来た団体の多くは撤収し、緊急救援から復興支援に活動内容が移行。SVAは、高齢者の多い、仮設住宅や被差別部落内の公営住宅での個別訪問を実施した。さらに、震災で焼け野原となった御蔵・菅原地区に新事務所を移転したことを契機にまちづくり支援にも乗り出した。また、被災地内において、地元のボランティア団体とのネットワークを支援するため、阪神・淡路大震災「仮設」支援NGO連絡会へのスタッフの派遣を行った。

96年4月からは、1年後のSVA神戸事務所撤収を念頭におき、長田区御蔵地区でまちづくり支援を行う「まち」コミュニケーション、仮設住宅で食事をを行った「春風会」、週

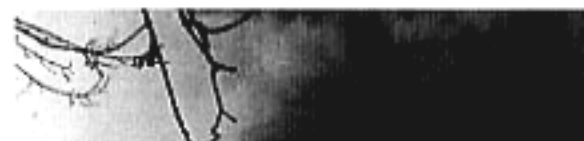
に一度の漢字学習を行って、まわりの会」の3団体の設立に協力した。その一方で被災地の状況が見えにくくなる中で、被災地と全国の支援者の方々をつなぐ取り組み(宮城の七夕飾りを提供してもらい夏祭りの実施、生活用品の提供をうけてバザーの実施など)を通じて、被災地内外に共有する問題が浮き彫りになるような活動を実施した。

後方支援を通して垣間見たもの

97年3月、現地事務所を閉め、SVAは「まち」コミュニケーション「春風会」「ひまわりの会」の運営を安定させるためには、財源が必要なことから、後方支援としての募金活動を行った。

この後方支援を通して、明らかになったのは、被災地全体の復興と個々の市民の生活再建が続いていることであることであった。

災害当初から5年間で約10兆円の公的支援が国から、被災地に投入されたが、これは震災の被害総額に匹敵する金額である。にもかかわらず、SVAの関わりのある御蔵・菅原地区にしても、まちに戻った人が3割定らず、しかも店を再建しても、売り上げが延びず、庶民が苦しむ姿



1995年1月17日、長田区・御蔵小学校。震災直後に発生した火事より避難する人々。



がそこにはあった。端的に言えば、道路や建物などのハード面の再建が、必ずしも市民の生活再建とは別問題ということであった。

阪神・淡路大震災の支援活動を通して見えたもの

様々な教訓を残した阪神・淡路大震災。特筆すべきは、都市型災害の恐ろしさである。機能的で快適な都市生活も、大自然の力は都市機能を麻痺させ、その基盤の脆弱さを露呈させた。また、海外の事例でも明らかのように、日頃から社会的、経済的にも弱い立場に立たされている人々が、このような大災害時にいわゆる「災害弱者」となり、さらに、復興時においても、自らの生活再建を十分出来ないことが国内外の共通する問題であることを改めて認識した。

郊外に大量の仮設住宅・災害公営住宅を建設し、多くの高齢者を移り



全国から多くのボランティアが、かけつけた。(1995年12月、SVA神戸事務所)

新たな救援活動の取り組み

住まわせたことが、市街地のコミュニティ崩壊に拍車をかけ、市民の生活再建を阻害した。

さらに、NGOとして問われたことは、自立支援とは何かということである。単に救援者が被災者を救援するという図式ではなく、被災者の自立支援という視点を抜きにした、支援活動はあり得ないことが明らかになった。

97年春、神戸事務所撤収のさなか、神戸で活動を共にしたボランティア

団体から、飢餓に苦しむ北朝鮮の市民への食糧支援活動への協力要請があった。その期待に応えるべく、全国に20箇所の食糧集積地を設置し、世界食糧計画(WFP)の協力のもと、2年間で約千トンの食糧を飢餓に苦しむ市民に手渡した。また、98年1月には、中国北部の地震支援、99年には、トルコと台湾での大地震における支援活動に取り

組んだ。そして、2000年秋にはカンボジア水害・三宅島の雄山の噴火災害、東海水害など、同時期に3箇所の災害が起き、その対応に追われた。そして、この1月下旬にはインド西部大地震が発生したが、調査団を派遣後、現地のNGOと提携し、支援活動を行っている。

新たな動き

「キーワードはネットワーク」

今回の震災では、縦割り行政が機能しないことが批判されたが、実は、民間団体側の縦割りも浮きほじりにされ、ネットワークが重要であることが指摘された。その反省から民間レベルでのネットワーク活動が活発化し、SVAも積極的に関わった。例えば、震災がきっかけで全国ネットワーク(震つな)は、阪神・淡路大震災に関わったボランティア団体・個人が、その教訓を生かし、日頃からネットワークし、災害救援の検証のために、ブックレットを年に一回発行している。また、東京での大災害に備え、民間団体約1000団体ネットワークとしてつくる、東京災害ボランティアネットワーク(東災ボ)は、平常時からゆるやかな連携と情報交換をめざし、人材育成も行い、今回の三宅島の大噴火に対しても、支援活動を行っている。一方、「ジャパン・プラットフォーム」は、海外における緊急人道支援活動を迅速かつ効果的に行うため、国際協力NGO、政府、民間企業などがお互いに協力す



阪神・淡路大震災が風化する中、2000年1月15～16日東京都庁都民広場では、「防災とボランティアを考えるつどい」が開催された。(提供：東京災害ボランティアネットワーク)

るシステムである。さらに、トルコの救援活動で情報提供頂いたアメリカのNGOをアメリカン・フレンズ・サービス・コミッティ(AFSC)との連携もあり、今後、欧米のNGOとの連携も本格化するだろう。

これらの動きを一言で言うならば、「災害対応は、友達作りから」であり、これが、21世紀のキーワードになるといわれる。阪神・淡路大震

災の被災地に対する後方支援活動は終了するが、これからも被災地との関係を持ち続け、必要に応じて、被災地の問題と全国各地とをつなげて行く。また、このたびの支援活動を通じて、SVAは、国内外を越えた多種多様なネットワークをつくることのできたが、これは我々にとって大きな財産である。このつながりを大切にしていきたい。



“まちづくり”はこれからが正念場 みくらの6年とこれから

り捨て、「隣はなにをする人ぞ」の都会が理想と錯覚していた。しかし、「自分だけ良ければ」という気持はこのとき毛頭なかった。共同生活のなかで、これが忘れていた人としての感情だと思い知らされた。人と人のつながりの深さ、心のやさしさ、人に尽してこそ自分の心が満たされるということが自覚できた。

でも、それはそんなに長く続かなかった。やがて全壊全壊家屋の再建や補修が始まると、力の差が明確に現れる。避難所からの応急仮設住宅への移動も始まる。仮設の抽選に当たった人、漏れた人。1年目の前半でさえ、震災で受けた傷のうえに、心理的圧迫がのしかかってきた。心のケアが叫ばれたこの時期を、表面的には、全国からのボランティアやその他何らかの支援でしのいできた。3年後の平成10(98)年、震災復興住宅整備3カ年計画(平成7(95)年7月神戸市策定)も兵庫県営災害公営住宅とともに進捗し、平成10(98)年9月には、仮設住宅の退去率は8割を超えた。しかし、その多くは旧市街地をはずれていた。みくらの2棟は、いずれも平成11(99)年秋以降にできたもので、入居率は3割強であった。結局この地域に戻りたかった人も郊外の公営住宅に先に入居しており、戻れなくなったのである。

みくらの現状はどうか。仮換地率は7割(平成12(2000)年7月7日第7回審議会)。公営住宅2棟に93戸という震災後の新しい世帯数を加えれば、全世帯数で見ると約5割の戻り率である。が、換地済みの用地における建物復元率はきわめて悪く、3割にも満たない。

そこには、俗にいう「震災ユートピア」が生れた。同じ被災者として、一杯の水、一個のおにぎりを、周りに配慮しながら他人と分かち合ったのだ。戦後は「物と金」を追い求め、それまで培ってきた農村共同体の良さまでなく

お節介でもいいじゃない

震災時、神戸のみくら(御蔵西地区)は8割強を焼失し、その後は土地区画整理の網がかかった。震災直後から近くに身寄りのない大半の人々は、避難所生活を余儀なくさせられた。でも、全国からのボランティアが神戸に集まり、送られてくるたくさんの救済物資等で、停電、断水、電話不通、道路、鉄道の寸断という壊滅状態の非日常のなか、被災者は命をつないだ。

春風会の若松仮設住宅での活動(1998年)



「まちづくりもハードにやるとまず、人々の生活をどう元の状態に戻していくかに頭を抱えている。幸い昨年10月から、神戸市による「すまい安心支援センター」もできたので、これを有効に活用して、換地済みの空白地をできるだけ埋めたいと思う。まちづくり協議会役員もかなりへばってきているが、これからは本格化だ。女性たちが組織している「わがまちの会」

では、「気遣うまち、支え合えるまち、響き合えるまち」を合言葉にしている。近所の子どもも、地域一体となって育てよう。近所の高齢者も、地域で見守ってほしい。お節介でもいいじゃない。お互い話し合い、多様性を認め合い、長田の下町の良さを活かしながら、このまちの再生を夢みている。「まち・コミュニケーション顧問 田中保三」

SVAさんありがとう



を取りあげています。

私たちの会では、婦人会員が、手芸教室を昨年、秋から開設し、平均24〜25名の方が楽しんでおります。高齢のご婦人の楽しそうな姿に、「心の癒し」の手法の一つ、テレホンサポート、訪問サポートをも展開しているのです。

95年暮れ、多くのボランティア団体が撤収、解散し、SVAもつと、私たち、通いのボランティアには落ち着かない日々が続いた2月初め、神戸事務所の市川所長(当時)より、「97年春撤退。ボランティア活動の継続は、あなたたちの意志に託します」と告げられました。本部との交渉はなまじいものではなかったはずと、所長の「苦労

96年4月に立ち上げた「春風会」も、時の流れとともに、現在は16名と、会員数は立ち上げたときの3分の1に減員されましたが、「私たちの仮設から孤独死は出さない」の信念で頑張りました。そして、見えない明日のために、「いま、心の癒し」

に合掌の気持ちでした。そして、この1年間の延長こそが、被災地外から来神の多くの団体がなし得なかった継続連携の拠点、「春風会」を神戸に残しました。SVAありがとうございます。「春風会 竹内敏夫」



文字を覚えて はじまる青春
～識字学級を見守りつづけて～

は歩み続けることができました。毎週土曜日10時から12時までの学習会を中心に、文化会館の作品展や識字交流会にも参加時には花見や遠出を楽しみます。会の立ち上げからずっと支援を続けてくださったSVAをはじめ皆様方のおかげ、と感謝しながら。

「年々から、いつも覚えられへん。そんなでも、来るな言われても来るで」「新聞を読めるようになった」「ハラホジのみもおぼえた。今までしらないこともわかるようになったのしい」「階段が上がられへん。行かれへん。悔しい」と、学習者。「今度はレシート集めてカタカナの勉強や」「個人文集、はよ仕上げよ」とスタッフ。一人ひとりの思いを汲み上げながら、互いに学びあえる場「ひまわりの会」。今年のテーマは「青春」です。【ひまわりの会 桂光子】

『ほんのりとおぼえたい』

と教室に通い続け、「きょうカタカナがかけるようになった、ものすごくうれしい」とほころぶ顔。「私は主人がびょうきでまります。からだのわるいから車いすをかりにいきました。区役所にいって、所名まえをかいて、かりてきました。自分でおしてかえてきました。しをして、まにあつてよかった」と緩るとききの晴れやかな顔。

「こんげんになりたい おとこ」になりた
いへんきようしたい」とつぶやく声に、高
齢になるまで読み書きが学べなかつた辛さ、
悔しさ、寂しさがにじみ出る。その悔し
さをバネに、鉛筆を握りしめる。「今さら
字を覚えて何になるの」という愚問を吹き
飛ばしながら。

昨年度は、「ふるさと」をテーマに取り組
んだ。「よっすこうちかくのうまれ ひゃ
くしょうで たんぼすくうし ばばた

け つかう わたしは くさぬき なつ
だけ あさのいしなぞ」「お母さんの手
があなたのかいのんがいまでもわすれない
げんきうんでくれましたので八十二ま
で私はげんきに生きています。……胸の
奥に沈めてきた思い出が少しずつ語られ
綴られていく。引きこまれるスタッフの
表情が変わっていく。共感、驚き、納得と
さまのまに。」

今日も、Yさんが書いてみたんやけど」と
とさしたした手紙には「わかばのいまこ
は、うしはあおいくさるさまで……と何十
年も前のことを振り返り、「夢のようなき
がします」とあった。しさんは、病院のベ
ッドの上で繰り返し返した、「みんなに言うて
ください。元気が大事やいって」と。その
横顔にスタッフと一緒に「初恋」を語り合っ
た日の羞じらいが重なる。

震災翌年の96年9月に誕生してから、
まもなく5年。識字教室「ひまわりの会」

私に	日本人と	言いました。	日本人の
くせに	日本の	字が読めない	のせいで
わかれ	ました。	私は	読んではく
よせ	ました。	人は	色々事情があ
うは	な	か	たのです。こ
に	行	きました。	ことかあ
き	ま	ました。	かか
か	ん	で	した。
ま	る	よう	になり

SVA緊急救援・復興支援活動の歩み

- 1995年**
 - 1月17日 午前5時46分、阪神地区においてM7.2の大地震が発生
 - 18日 被災地における緊急救援活動を行うことを決定
 - 19日 スタッフ2人を調査のために現地へ派遣
 - 26日 兵庫区・八王寺に対策本部を開設、ボランティア第二陣派遣
- 1996年**
 - 2月15日 兵庫区・真光寺に拠点を移転
 - 4月7・8日 長田区豊原商店街で「花まつり」を行う
 - これより「仮設住宅」と「市営住宅」の支援、「子どもの遊び場づくり」の3つのプロジェクトに活動をし始める
 - 緊急救援活動終了、復興支援活動へ
 - 8月2日 事務所を長田区御藏5丁目に移転
- 1997年**
 - 現地で活動する団体の立ち上げ支援のための1年として位置づけ
 - 4月初旬 まち「コミュニケーション事務局立ち上げ協力
 - 中旬、選いボランティアによる仮設住宅訪問グループ「春風会」結成
 - 9月28日 識字学級「ひまわりの会」開始
 - 3月14日 阪神大震災救援活動を総括する豊洞宗関係者の集い
 - 15日 これからの被災地と私たちを考える集い「神戸」
 - 31日 SVA神戸事務所閉所（のべ803日におよぶ現地事務所での活動終了）
- 「新たな支援活動のスタート」**
 - 6月 北朝鮮食糧支援（98年8月まで）
 - 11月 震災がつかなく全国ネットワーク設立
- 1998年**
 - 1月 中国北部地震支援（救援物資支援）
 - 東京災害ボランティアネットワーク設立
- 1999年**
 - 8月 トルコ大地震支援（コーディネーター派遣）
 - 9月 台湾大地震支援（資金協力）
- 2000年**
 - 8月 シヤパンプラットフォーム設立
 - 9月 カンボジア大水害、東海豪雨、三宅島支援活動（物資配布及び資金協力）
- 2001年**
 - 1月 インド西部大地震支援（資金協力）

『震災が残したもの』刊行続ける

Aiyann Tokyo

Ayan Tokyo
福田信章代表

Aiyann Tokyoは、阪神・淡路大震災の救援活動に、SVAのボランティアとして関わったメンバーが、結成したボランティアグループ。『震災が残したもの』刊行や勉強会を行なっている。今回は、代表の福田さんに話を聞いた。

「伝えてやる」が「知らなくちゃ」に変わった

Aiyann Tokyoが刊行した『震災が残したもの』は、メンバーが被災地で、被災者やボランティアの声を再念に聞き取ったインタビュー集。元仮設入居者、自治会役員、

商店経営者、闘病中の人、韓国籍の人、直接被災していない人、ボランティアらが、自分の言葉で震災の体験や現在の想いを語る。マスコミの報道が減っていくなか、神戸の人びとには、震災がいまも生活に陰を落としていくことが伝わる、貴重な証言だ。

Aiyann Tokyo代表の福田信章さんは、『震災が残したもの』

刊行には、新聞に書かれない神戸を伝え、考えてもらおうという気負いがあったと振り返る。が、同じ人から何度も聞き書きし、初めて見えてくるものや気づかされるのが重なり、自分たちがまず現実を知らなくちゃという心境に変わった。

「誰でも参加できること」を大切に

福田さんは、信号が機能しなくなった被災後の神戸で、交通整理のバイトをしているうちにSVAのボランティアと顔見知りになり、避難所の仕事を手伝うようになった。福田さんはそれまで、連日流されるニュースを見ても、震災は「湾岸戦争と

おなじ」で、自分とどういう接点があるのか確認できなかった。しかし、仮設住宅を訪問するようになって、被災地は日本社会の縮図だと感じた。片親家庭やお年寄り、障害者などから話を聞いて、「日常見えなかったものを目の当たりにした衝撃」を受けた。

現在、会員は50人ほど。中心は20代だが、10代から60代までの幅広い層がかかわる。被災地を知らない人、出版に関心をもつマスコミ志望のメンバーもいる。名前の由来は、関西弁の「えーやん」。福田さんは、「誰でも参加できること」を大切にしているのだ。

負荷を克服しないと変わらない

やれる範囲で無理なくやる、では、いつか途絶えてしまう。負荷を克服していくことで、個人も組織もキャパシティが広がるというのが持論。『震災が残したもの』の刊行は今後も続くのかとの問いに、福田さんは「続へ」ではなくて、「続けろ」なんです。10年しななくちゃ意味がない」と言い切った。

好評発売中

シヤンティブックレットシリーズ2

混沌からの出発

SVA阪神・淡路大震災救援活動の歩み

A5判 143ページ 価格 900円(税・送料別)



シヤンティブックレットシリーズ

被災地に学ぶ「まち」の未来

A5判 24ページ 価格 400円(税・送料別)

1999~2000年度 阪神復興支援事業 収支報告書

(1999年4月1日~2001年3月31日)

社団法人シヤンティ国際ボランティア会
会長 松永 然道

	1999年度	2000年度	合計	構成比
(a) 前期繰越金	5,072,219		5,072,219	42%
(b) 当期寄附金収入	7,121,837	17,505	7,139,342	58%
(1) 収入合計	12,194,056	17,505	12,211,561	100%
春風会支援金	200,000		200,000	2%
ひまわりの会支援金	1,500,000	500,000	2,000,000	19%
ひまわりの会事務局支援	1,527,600		1,527,600	15%
まち・コミュニケーション支援金	2,000,000	500,000	2,500,000	25%
御蔵地区慰霊碑建立支援金		500,000	500,000	5%
被災地NGO協働センター支援金		500,000	500,000	5%
阪神復興市民検証フォーラム支援金		50,000	50,000	0%
記録制作・広報費等	2,271,133		2,271,133	22%
(a) 直接費小計	7,498,733	2,050,000	9,548,733	93%
(b) 事務管理費 (a)×10%	749,873		749,873	7%
(2) 当期支出合計	8,248,606	2,050,000	10,298,606	100%
(3) 収支差額 (1)-(2)	3,945,450	▲2,032,495	1,912,955	(注)

注)収支差額は、この最終報告書の印刷費及び郵送費に充当し、残金を「SVA緊急救援基金」に繰り入れます。

(単位:円)